おまえざきの人 きらり輝く人

今生きている奇跡に感謝して
栗山 さやか さん

PROFILE
くりやま　さやか　（大山・35）
109の元ショップ店員、バックパッカーとして世界を旅し、現在モザンビークでNPO団体『アシャンテママ』の代表として女性や子どもの支援活動を行う。

はるか1万2000キロ離れた地で

日本から遠く離れたアフリカモザンビークでNPO団体「アシャンテママ」を立ち上げ、貧困に苦しむ女性や子どもを支援する活動を続けている1人の日本人、栗山さやかさんをご存じだろうか。

栗山さんは御前崎市で生まれ育ち、池新田高等学校を卒業後、東京の短期大学へ進学。渋谷でショップの店員そして店長、OL、フリーターなどさまざまな経験をした。

ショップ店員の頃は金髪ガングロ、当時はやりのギャルそのもので、日焼けサロンで肌を焼きネイルやメークで外見を飾っていた。そんな彼女がなぜ海外で支援活動をするようになったのだろうか。

生きることへの考え方の崩壊

東京でお金を稼ぐことに必死になって生活していた頃、小学校からの親友（故平田由佳さん）が病に倒れた。お見舞いに行くと「無理してない？」「しっかり食べてる？」と忙しさにかまけ、なかなか会いに来られなかったのに栗山さんの体の心配ばかり。胸が締め付けられる思いだった。その3日後に平田さんは帰らぬ人となる。なぜ、もっと会いに行かなかったのか、お金を稼ぐことに執着していた意味はあるのか。栗山さんはこれまでの自分の生き方、考え方の全てが崩れ落ちた気がしたという。

「今この瞬間を生きている私は、残された人生をどのように生きていくべきなのか」自問自答しながらこのままではいけないという思いが膨れあがっていった。

「何か行動しよう」と、もともと興味のあった海外へ行くことにした。「旅することで何が変わるかわからないけれど、まずは自分の意思で一歩を踏み出してみよう」と大きなバックパックを背負い海外へ旅に出た。

3週間のつもりが

海外の発展途上国に興味を持ち、インドの医療施設などでボランティアをしながら旅を続け、気がつけば約9年もの海外生活。栗山さんは「当初は3週間程度の予定だった